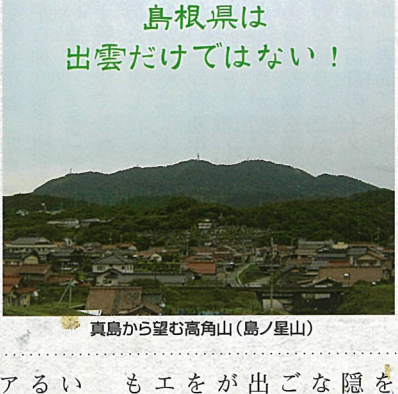
島根県は出雲だけではない！



真島から望む高角山（島ノ星山）

島根県では、『古事記』編纂一三〇〇年を記念して、七月二十一日から「神話博しまね」が始まった。なるほど出雲には出雲大社があるので、神々の世界という印象が強い。それゆえ、出雲大社周辺がメイン会場になるのはごく自然のことであろう。

だが、「神話博しまね」は、島根県を四つのエリア（松江・出雲、雲南、隠岐、石見）に分けており、その広大な県域からすると、現在の出雲はごくごく狭いエリアに過ぎない。こうした出雲中心の博覧会は、出雲を見ることが島根全体の理解につながるとの誤解をうけかねない。逆に、ほかの三つのエリアは、広大な領域に比して、もともと印象が薄いという点は否めない。

そうした中で、私があえて紹介したいのは、石見エリアの柿本人麻呂である。人麻呂のことは、すでに石見エリアの項目としてあがっているが、人麻呂が石見にゆかりが深いことは、地元の人たちや『万葉集』愛好家を除けば、ほとんど知られていないのが現状であろう。『古事記』編纂期に活躍した人麻呂が、石見についての長大な万葉歌を残していることを、他府県の人がどれだけ知っているであろうか。

石見のや　高角山の　木の間より
我が振る袖を　妹見つらむか
（巻第二―一三二番歌）

紙幅の都合上、ここでは短歌一首にとどめる。人麻呂の残した歌は、石見相聞歌と呼ばれる一群であり、石見から妹（妻）と別れて、都に帰る時の心境を詠んでいる。私がこの歌を選んだのは、舞台となる都野津から見た風景が明快で、見逃すことの方がむしろ難しいほど、高角山（島ノ星山）が目にとまるからである。歌を知ってこの風景を見た時に、妙に納得するのは私だけではないだろう。人麻呂が見た風景は、千三百年後の今とさほど変わらないのではないか。

石見相聞歌は奥が深い。しかし、地名ひとつでも十分魅力を感じ取ることができる。神楽や石見銀山もよいが、この機会に石見の都野津の景観を見に出かけられてはいかがであろう。

（万葉文化館主任研究員・竹本晃）